自己責任か　福祉の問題か

国立社会保障・人口問題研部長　阿部彩さんに聞く

―統計では、日本の子どもの七人に一人が貧困状態にあるといいます。

まず、強調したいのが子どもの貧困は、リーマンショックなど昨今の不況で突然、起きた現象ではないという点です。一九八〇年代以降、徐々に上昇しています。これは問題が一過性ではなく構造的であることを意味します。厚生労働省が二〇〇九年に公表した貧困率15・7％という数字も、国内の景気がまだ良かった〇七年のデータを基に算出しています。

―なぜ、これまで目立たなかったのでしょう。

連載にもあったように現代の貧困は見えにくいのです。かつて「貧困」と言うと、食べ物が無くて飢え死にしたり、家が無くて凍え死んだりといったイメージでした。しかし、現代の貧困はそうした様相とは異なります。

ある小学校の先生から聞いた話ですが、社会見学や理科の実習になると必ず休む児童がいました。たまたま休んでいるだけと思っていたが、よくよく聞くと家が貧しく、実習費用を母親に欲しいと言えない事情がありました。給食費未納に端を発したモンスターペアレンツの問題もそう。経済的に困難な家庭も含め、親の怠慢だと個人責任に帰してしまっているのです。

―どうすれば貧困は見えてくるのでしょう。

実は大抵の人は既に貧困の概念を持っています。例えば、七歳の子がランドセルを買えないとすれば、多くの人はかわいそうだと感じるでしょう。運動靴でも文房具でも子どもたちが当たり前に持っているものを、持てない状態。これこそが現代における貧困です。かつてのイメージに縛られることなく現実を見据えれば、貧困はおのずと見えてくるはずです。

―貧困は子どもたちの成長にどんな影響を与えるのでしょう。

社会において当たり前とされる生活が送れず、普通の子どもが得られるチャンスや選択肢が与えられません。度重なる挫折は、子どもたちの自尊心を傷つけ、将来の夢や希望をも奪っていきます。子どもたちの心を蝕むことこそ、最も恐れるべきことです。

―貧困とどう向き合うべきでしょう。

医療費を払えない子どもをどう救うかなどといった早急に対処すべき課題は多い。けれど、それらはあくまで対症療法にすぎないのです。根本的には自己責任論を基本とした米国型の小さな政府を目指すのか、北欧型の福祉国家を目指すのかという私たちの選択に委ねられています。

例えば北欧や大陸ヨーロッパは幼稚園から大学まで学費は無料です。これは、教育は金持ちだろうがそうでなかろうが、機会を社会が保証すべきだという同意に基づいています。

貧困は自己責任の問題だとして追認してしまうのか、否か。貧困に気づき始めた今、私たちはまさに岐路に立っているのです。

あべ・あや　国連、海外経済協力基金を経て、国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部長。研究テーマは貧困、社会的排除、社会保障、公的扶助。著書に「子どもの貧困」（岩波新書）「生活保護の経済分析」（共著、東京大学出版会）など。

第1部　未来が泣いている　反響特集

子ども貧困

一月一～十日に社会面で連載した「子ども貧困　第一部・未来が泣いている」には、二百件を超える感想や意見が寄せられた。手紙やメールには子どもたちが直面する現実への驚きや、紙面と同様に困難を抱える当事者の苦悩が綴られている。

私たちの足元を浸食しつつある子どもの貧困。自己責任に帰すのか、支え合いの社会を目指すのか。貧困研究に取り組む国立社会保障・人口問題研究所部長の阿部彩さんは「私たちは岐路に立っている」と指摘する。

「私、頑張れる」

同世代の姿に励まされ

進学危ぶまれた愛知の高３女子

愛知県内の高校三年生ユカさん（仮名）は、経済的な事情から大学進学の機会が危ぶまれた体験を書き送ってくれた。

トラック運転手の父がリストラに遭ったのは、受験を目前に控えた昨年十二月。家族に進学費用を負わせる罪悪感から勉強が手に付かなくなった。

両親と姉、弟の五人暮らし。ギャンブル好きの父は金遣いが荒い。食品工場で働く母と昨春、就職したばかりの姉の収入でほそぼそと暮らす。

県内屈指の進学校に通うユカさんは、母から「お金が掛かるから一人暮らしはやめて」と言われ、志望校は地元の国立大に絞った。

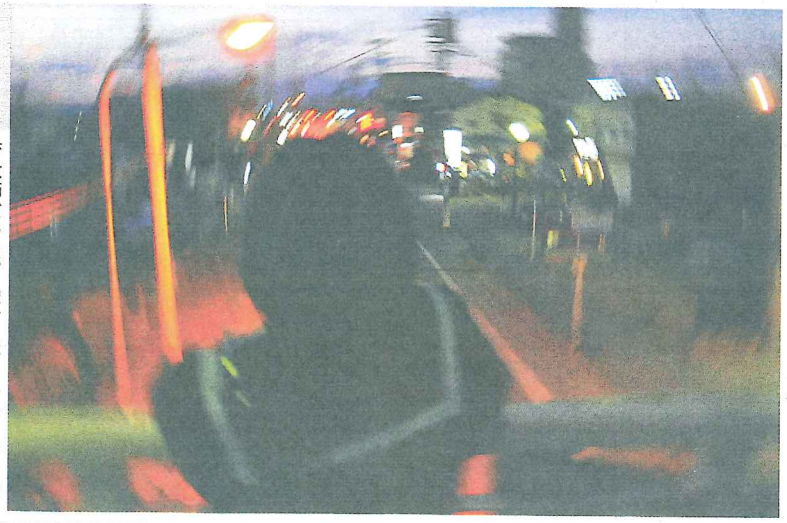
父の失職以来、両親はいさかいが絶えない。ストレスで当たり散らす父を必死になだめる母。「ユカが大学落ちたらあんたのせいだから」。部屋にこもり勉強に集中しようとしても、母の泣き声が壁伝いに聞こえてきた。「消えてしまいたかった」

学校では明るく振る舞った。一度、友人に事情をうち明けたが、真に受けてもらえず笑われてしまったからだ。「貧困てダサいと思った」。孤独だったという。

悩んだ末に頼ったのが以前から気の合う体育教師だった。「父親、今失職してて…」。傷つくのが怖くて、わざと冗談ぽく話した。

だが、教師は真正面から受け止めてくれた。「話を聞くことしかできないけど」。そのひと言は、想像以上にユカさんの気持ちを軽くした。「今を懸命に生きよう」

心が揺れ動く日々の中、新聞記事を目にした。紙面に描かれた同世代の若者たちの姿に「私はまだまだがんばれる」と思えたという。二次試験まであと、わずかだ。



取材班にメールをくれた女子高生。受験を目前に控えるが、常に経済的な不安がつきまとう＝愛知県内で

読者から200以上の意見

「受験１校だけ」に温かい激励

経済的に余裕がなくて進学できなかったり、進学先が制限されたりしている子どもたちの現状に、「何とか力になりたい」とのお便りが次々届いた。

五回目で取り上げた大学受験真っただ中の美香さん（仮名）は受験費用が捻出できず、一校しか受けられなかったが、読者からの支援で他の大学も受験できる可能性が高まった。美香さんは「温かい激励にすごく驚き、ホッとしている。プレッシャーも感じるが、合格できるように頑張る」と話している。

周囲の助けに救われる

愛知県豊田市、パート女性（42）

母子家庭で小学５年と小学３年の息子がいる。介護士や保険外交員の仕事をしてきたが、急性の腎盂腎炎や突発性難聴になるなどの体調不良からうつ病にもなった。

現在は、自動車の組立工場で働く。月給は７万5000円で、民間アパートの家賃が４万円。自分が食べられなくても子どもにはおなかいっぱい食べさせたいと、献立を工夫している。

貯金はなく、頼れる親戚もいない。「子どもたちだけは幸せにしなければ…」との思いと、「全てを終わりにして楽になりたい」との思いの間で、毎日揺れている。

唯一の救いとなっているのが周囲の助け。今年の正月は年末からお金がなく、豚汁とご飯しか用意できなかったが、カニを届けてくれたり、餅をもらったり、知人に助けられた。人とのつながりの大切さを実感している。